

チャールズ・ブース

——情熱と冷静の間で——

町村敬志（一橋大学大学院社会学研究科教授）

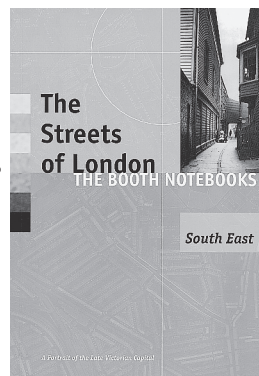
世の中には、名前は知られていても実際にはほとんど顧みられることのない仕事というものがある。ブースのロンドン調査もそうした例の1つと言えるだろう。『ロンドン市民の生活と労働』*Life and Labour of the People in London* 全17巻（1989-1903）は、繁栄の絶頂にあったヴィクトリア朝後期のロンドンの都市生活を細部にわたって描き出す。1840年、リバプールに生まれたブースは実業家として活躍した、いわば調査のアマチュアであった。ロンドンに移ったブースは、労働者階級が多数暮らすイースト・ロンドンの実態に直面し、1886年から調査を始める。その結果、ロンドン市民の実に31%が貧困線以下の生活を強いられていることを実証してみせた。

調査の最大の特徴は、人口300万人を超えるロンドンの全体像を、あくまでも人びとの日常生活圏にまで降りて徹底的に描き出そうとしたところにあった。この困難な課題に取り組むためブースは、ロンドン中の街路ごとにそこで暮らす人びとの様子や景観についての質的情報から住民の階層を判定し、細密に階層を色分けした貧困地図を作成する。情報収集のため、ブースや協力者たちが現地調査を行ったほか、各地の実態に通暁した視学官や警察官など膨大な数の関係者への大量インタビューが実施された（J. Steele ed., *The Streets of London: The Booth Notebooks—South East*, 1997, Deptford Forum Publishingを参照）。

それにしても、かつてロンドン調査にも参加したベアトリスを含むウェット夫妻が「一介の私人が自分の費用で行ったものとしては、おそらく史上最大の統計事業」（川喜多喬訳『社会調査の方法』東京大学出版会、1982年、194頁）と述べた試みをブースはなぜ始めたのか。「貧困」「産業」「宗教の影響」と続くシリーズは、後半に進むにつれて平板さを増し、変化する時代から取り残さ

れていく。にもかかわらず、こんな途方もない作業へとブースを駆り立て続けたものとはいったい何であったのか。筆者が卒論でロンドン調査に取り組んだとき最後に行き着いたのもこの疑問であった。一応の答えはこうだ。資本家ブースは労働条件や貧困といった社会問題の解決に力を注ぐに当たって、まずは科学的なデータによる裏付けを求めた、と。背景には、実証主義的な精神、資本家としての社会主義への不安、そして社会的関心の強い妻の影響などがあつた。だがそれだけでは、膨大な私財を投じ15年以上も調査を続けられた理由としては十分とは言えない。

網羅性を律儀なまでに重視したブースの調査には、膨大な事実は含まれているもののそれを束ねる物語が欠けている。20年ほど後のシカゴ学派からみてもロンドン調査とは、その結果ではなく方法において評価される存在であった。だが今日また、貧困や宗教をめぐる新たな緊張が街を切り裂いているのに出会うとき、ブースの醒めた禁欲と実証への執念が残した成果には新たな光が当てられるように思う。当時の記録を手にもロンドンの街を訪れると、驚くほど変わっていない場所が多い一方で、ドックランドなど再開発によって景観が一変してしまった場所に出会う。私たちは調査によって、時代を超えた何を残すことができるのであろうか。また何を残すべきなのか。今、調査に突きつけられているものは決して小さくない。



The Streets of London

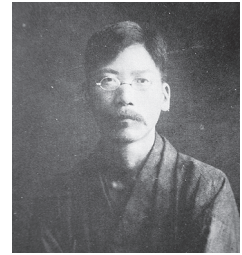
横山源之助の「近代の視線」

日清・日露戦争を挟む明治後半から大正初め、日本は、産業革命を経て機械工業の隆盛をみた。農村では寄生地主が増え、貧しい小作人が都市へ流れていた。都市では、労働と貧困の問題が生じていた。下層社会の主役は、伝統的貧民（職人や小商人、雑芸人等の雑業層）から近代的貧民（日雇いや職工等の雇用層）へ交替していた。その景観は、辻裏通りの長屋から貧民窟・木賃宿街に変貌していた。このような時期、横山源之助（1871-1915）は、通信記者として、木賃宿に泊り、工場を訪ね、農村を歩いて、雑業民や職人、職工、小作人の労働と生活を調査し、新聞・雑誌に記事を書いた。そして、資本主義の諸結果を下層社会から批判し、そこから、労働・貧困問題の解決を図る方途を模索した。この中で編まれたのが、『日本の下層社会』（1899）である。

本書には、横山の「近代の視線」がよく表れている。本書以前にも、いくつかの貧民窟・木賃宿街ルポがあった。しかし本書は、それらと異なっていた。まず本書には、下層社会を一般社会へ包摂して捉える視点があった。本書以前のルポでは、貧民窟・木賃宿街は、一般社会とは異質な社会空間として記されていた。書き手は、驚嘆と恐怖をもってそれらを探検し、住人の極貧の生活と奇異な慣行を記していた。これに対して本書では、下層社会は、一握りの中流階級以下の多数を占める貧民が住む、一般社会と同質の社会空間として記された。次に本書では、都市の孤立した貧民窟・木賃宿街に視線が釘づけされた本書以前のルポとは異なり、日本の下層社会の全体、すなわち小作人から職工まで、下層社会の全体が鳥瞰された。さらに本書には、記述に対する方法的な問題意識があった。本書以前のルポでは、下層社会は、若干の項目を立てながらも、書き手の恣意的な見聞と感想の赴くまま記されていた。これに対して本

青木 秀男（社会理論・動態研究所所長）

書では、観察・聞き取りの資料と統計資料が併用され、貧民の労働と生活が、雇用・労働・居住・救済等、統一された分析項目に沿って、整然と記された。また、地方と地方、地方と全国を比較する一般化の方法が取られ



横山源之助

た。そのために、職工、小作人、労働組織、雇用関係等の範疇が、類型的に整理された。このように本書では、探検的・体験的・主観的な記述を越えた、合理的・体系的・客観的な記述の方法が取られた。最後に本書には、貧民の労働・貧困問題をどう解決するかという、実践的な問題意識があった。労働・貧困問題が、資本主義の産物であるものなら、社会はそれを解決できるはずだし、またその義務を負う。貧民の調査研究は、その問題解決のためにある。横山はこう考えた。

横山は、貧民を愛し、貧民が被った資本主義の残酷を告発した。横山は、労働問題の解決を図り、労働運動に参加した実践家であった。貧困解決の方途として、貧民の海外移住に注目し、自らブラジルに出かけもした。しかし他面で、横山には屈折する近代の顔があった。横山は、「勤勉な」貧民を称え「懶惰な」貧民を非難した。また、体制変革の社会主義と袂を分かち、改良主義の運動を求めた。そして政府に近代的な施策を懇請した。さらに横山は、物価の騰貴を招いて貧民を苦しめたと戦争を批判した。しかし他方、帝国主義的な朝鮮半島と「満州」の領土支配を歓迎した。横山は、下層社会の科学的調査を行い、開明的な提言を行った。同時に、日本の近代自体が胎む闇を抱えていた。横山は、2つの顔をもちつつ、貧困問題を論じる時代の人であった。